mediopos 31

2016.12.6 ～ 2016.12.29

【神秘学ポエジー～風遊戯　第 67 集】

media-poesie ヴァージョン

mediopos751-775

神秘学遊戯団

mediopos-751
2016.12.6

■近藤秀秋『音楽の原理』（アルテスパブリッシング 2016.11）

「幼少時、私は眠るのが怖かった。目を閉じると白と黒の線状の模様が動き回り、それを捉えている自分の意識がなくなる瞬間が訪れるのが怖かった。もし自分が死んだら、この意識がなくなった状態が永遠に続くような感覚なのだろうなと思っていた。眠りには、死の恐怖に近いものがあった。その後、私は幸運にも人並みに成人することができたが、その過程で人生の重要なテーマとなっていったものは、立身でも経済活動でもなく、幼少時に恐れ続けた無の世界の対極にあるものであった。生それそのものの覚知、リアリティである。いずれ死ぬという覚知をずっと引きずっているのは今も同じだが、それは死を恐怖することではなく、生をどう生きるか、どうあるかという方向に向かったのではないかと思う。そしてその最終段にあるものが、生とは何かということだった。それを論理ではなく真理から捉え、それでも最後に私に残るところのもの、哲学にも物理にも夢中になって取り組んだ青年期だったが、この問題に最良の解答をもたらしたものは、以外にも音楽だった。音楽という謎めいた現象には、私が問題にしてきたリアリティに関する解答が暗示されているのではないかと思う。」

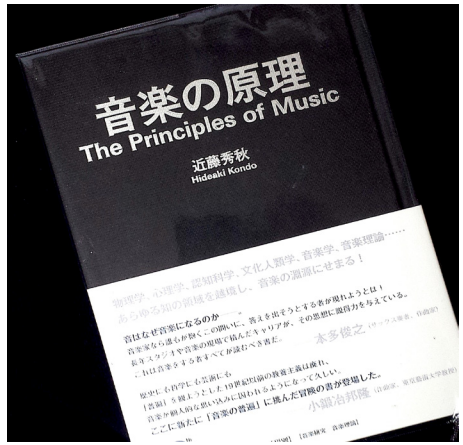
「音楽には原理がある。音楽の価値には根源的なものと演繹的なものがあるが、とくに根源的なものは、音楽の成立の時点ですでに決定的なものである。音楽の原理を理解したところで、その先にある音楽の志向する先を覚知できなければ、それは衒学にすぎなくなってしまう。音楽の志向する先にある極点を捉えること、これは音楽の原理を知ることと表裏一体である。

音楽の志向するものが何であるか、これは原理の章ですでに解答している。問題は、それが文化や個人というコンテクストを通して目指された際に、どのような覚知が発生し、あるいは偏向するのか、という点にある、音楽がその成立要因からすでに志向的なものであることは、すでに何度か述べてきたが、この問いは、人がなぜ生きなければならないかという問答と似ている。その問いに関する回答は単純だ。生きなくても構わないが、元来人間の成立の時点で生きるということがすでに志向されている。だから生きるということは前提であり、その先に、では生きるということはどのようなことであるか、これを追求すると、最上の生というものが見えてくる。最上の生を生きる義務はないが、最上の生に優る生はない。最上は、生きるという前提のうちにすでに含まれているものなのである。音楽にも同様のことが言える。音楽はその原理の時点で、すでにある方向づけのうちに成立している。最上の音楽を目指す必要はないが、音楽創発の時点ですでに最上の音楽のイデアは決定している。」

「われわれを方向づけているものは、散逸構造によって世界に接地しかつ独立しているというわれわれの身体のあり方である。こうした身体を把握しているものは、それぞれに自律してある身体そのものと、全体として構造化されている身体、この二つである。このようにしてある身体の向かう先は、身体のパースペクティブから言えば外的世界、全体のパースペクティブから言えば身体と外的世界との関係性、調和である。身体の、あるいは身体と外的世界との関係構造の中で、音楽はその志向性を獲得する。

内観に注視すれば。音楽は内観という形で具象化する生を、リアリティをわれわれにもたらす方向に働いているように見える。否定することのできない生々しい感触そのもの。外観に注視するならば。音楽は、通常では見え難い現象の本質を現すことを目的としているかのようである。形象の具現というだけではなく、通常では見え難い現象のイデアを形成すること。内観や外観を通し、智や意志と相互作用させた上で創発するところから音楽を見つめれば、音楽は「意味」を踏まえて、ある「認識」に至ることを志向しているように見える。通常では認識することのできないわれわれ自身が持つ志向性、またわれわれ自身を含めて存在する上部のあるいは下部の構造が示すところのもの、これを認識すること。音楽の実践はここに根ざし、またここを目指すものであると、私には感じられる。

知識と認知と身体をまたいで現象してくるもの、その受け取りの感触、認識、定立する意味、音楽の本質はここにある。その価値は、われわれ自体がすでに持っている志向性から真理化される。」



世界がある
私はこの世界で生きている
そしてそこに音楽がある

世界があるのは
世界を志向しているということ
私は世界の源に湧く水を飲み
その先にあるものを求めようとする

生きているのは
生を志向しているということ
私は生の源に湧く水を飲み
その先にあるものを求めようとする

音楽を聴くのは
音楽を志向しているということ
私は音楽の源に湧く水を飲み
その先にあるものを求めようとする

mediopos-752
2016.12.7

■中沢新一『レヴィ＝ストロース　野生の思考／未開の力を呼び起こせ』（NHK 出版 2016.12）

「コレージュ・ド・フランスの同僚に、ジャン＝ピエール・ヴェルナンという優れた古代ギリシャの研究家がいました。レヴィ＝ストロースの構造主義を真っ先に取り入れて、ギリシャ神話の分析を始めた人です。ヴェルナンは古代ギリシャにも、travail に相当する言葉はなかったということを発見します。古代ギリシャ人は、半分は「構造」的な世界に生きていた人たちで、「歴史」の世界が入って変質しはじめてはいたものの、未開社会の人々と同じ野生の思考がまだ生き残っていました。その古代ギリシャでは、働くことを「プラクシス」と「ポイエーシス」という２つの言葉で表現していました。

プラクシスというのは、普通「実践」などと訳されますが、古代ギリシャではもともと、行為する人間が自分自身のために事物を「使用する」という意味で用いられました。それに対してポイエーシスには、事物をそれ自体の目的のため、あるいは使用する人の目的のために「つくり出す」という意味があります。例えば、陶器職人や木工職人たひが、何か有用なものをつくる場合、これはプラクシスではなくポイエーシスです。ある物を自分の目的のために変形して使うのではなくて、その物の中にすでに存在する形を外に取り出すと考える。それは、「土や木が望んでいることを実現する」という考え方に近く、いわば自然物の中に隠されている目的を外に取り出して、役に立つ用具にしたてるという作業が職人の仕事であり、ポイエーシスだということになります。

ヴェルナンは、労働の概念の中で、このポイエーシスに相当する考え方が、ヨーロッパではだんだん日常用語の中から消えていったことを明らかにしています。」

「レヴィ＝ストロースは、労働概念の中にこのポイエーシスの要素を取り戻そうと考え、それが日本の職人の中に生きているはずだと睨んだのです。彼は日本の職人たちがつくった様々な陶器や塗り物、着物や家具などを注意深く観察しています。また、いまでこそ芸術家と呼ばれる画工や絵師などの職人が描いた絵をたくさん見ています。その中に、ポイエーシス的労働の考え方が生きているはずだと思ったのでしょう。この推定はまったく正しいと思います。なぜなら、ここでポイエーシスと呼ばれているものは、柳宗悦が日本語で「民藝」と呼んだものと深く関わっているからです。

柳宗悦は「用の美」といいました。機能的な用途を持ちながら、多くの民藝的作品がたとえようのない美をたたえているのはなぜか。名のある芸術家ではない、無名の職人たちがそれをつくる過程で、どうしてこの美しい焼き物や農具の形がでてきたのか。そのとき、柳宗悦は「受動性」ということを考えました。芸術家が自分のプランを対象物である木や土に押し当て、それを変形して使うことで作品をつくるのではなく、職人が自然物の中に隠れている本来の機能を受動的に取り出して民藝品をつくると、それを使用する庶民の感覚にぴたりとはまります。これが、民藝の基本的な思想ですが、それはまさに、プラクシスに対するポイエーシスにあたるものです。

これを宗教的に表現すれば、浄土真宗の他力思想にも結びつきます。」

「このあたりを探っていくと、日本人の精神構造のいちばん深いところに辿り着きます。鈴木大拙の言葉を借りれ

仏師が仏を掘り出し
職人が美しい形を生み
妙好人が仏を祈りだすように
詩人は言葉をポエジーにする

物には四大が幽閉されている
四大は解放されなければならない
解放するのはポイエーシス
物は祈りとともに解放される

人にも四大が幽閉されている
人がみずからの四大を祈りだすとき
知は智となり言葉はポエジーとなり
物は秘密を歌いはじめる

mediopos-753
2016.12.8

■ジョナサン・ハイト『社会はなぜ左と右にわかれるのか／対立を超えるための道徳心理学』（紀伊國屋書店 2014.4）

「皆で仲良くやっていこうよ（Can we all get along?）」。これは、一九九二年五月一日に、ロドニー・キングが発した有名な言葉だ。キングはその一年前、ロサンゼルス警察の四人の警官から激しい暴行を受けた人物である。アメリカ十ガビデオ撮影されたこの暴行シーンを見ていた。そのため、陪審員が警官たちに無罪の裁定を下したとき、市民のあいだに激しい怒りが巻き起こり、ロサンゼルスでは六日間にわたる暴動が発生した。(･･･）

テレビのインタビューの応えていた彼は、涙をこらえ、同じ言葉を繰り返しながら、次のように付け加える。「お願いだよ。ここで仲良くやっていけるはずさ。必ず仲良くやっていけるはず。誰もが、ここでしばらく生きていかなくちゃならないんだ。だから、やってみようではないか。」と。

本書は、皆で仲良くやっていくことが、なぜかくも困難なのかを考える本だ。実際に私たちは、ここでしばらく生きていかなくちゃならない。だから、なぜ私たちはすぐに敵対するグループに分裂し、おのおのが自分たちの正義を盲目的に信じ込んでしまうのかを理解するために、少なくとも、まずはできることから始めなければならない。」

「私たちの＜正義心＞は、親族関係という接着剤なしに、大規模で協力的な集団、部族、国家を形成することを人類に可能にしたものであり、他の動物はこの能力を持っていない。しかし同時に、協力関係によって成立している集団同士が、道徳をめぐる争いに終始するような状況をもたらした。とはいえ、集団間のある程度の競争は、社会の安寧や発展に必要なのかもしれない。私は１０代の頃、世界の平和を願っていた。しかし現在では、いくつかの対立するイデオロギーのバランスが保たれｍ説明責任の名のもとで悪事が見過ごされることなく、「正義のために暴力的な手段を正当化する」などとは誰も考えないような世界の実現を切に望んでいる。それは確かにロマンチックなバラ色の未来像ではないが、実現の可能性は十分にある。」

「本書では、なぜ人々は政治や宗教をめぐって対立するのかを考察してきた。その答えは、「善人と悪人がいるから」というマニ教的なものではなく、「私たちの心は、自集団に対する正義を志向するよう設計されているから」である。直観が戦略的な思考を突き動かす。これが私たち人間の本性だ。この事実は、自分たちとは異なる道徳マトリックスのもとで生きている人々と理解し合うことを、不可能とは言わずとも恐ろしく困難にしている。

したがって、異なる道徳マトリックスを持つ人々と出会ったなら、次のことを心がけるようにしよう。即断してはならない。いくつかの共通点を見つけるか、あるいはそれ以外の方法でわずかでも信頼感関係を築けるまでは、道徳の話を持ち出さないようにしよう。また、持ち出すときには、相手に対する称賛の気持ちや誠実な関心の表明を忘れないようにしよう。

ロドニー・キングが言ったように、誰もが、ここでしばらく生きていかなければならないのだから、やってみようではないか。」

正しさは中ほどに
中ほどとは
仲良くやっていくということ
「ここでしばらく
生きていかなければならないのだから」

シーソーの片側で
みずからの正しさを叫び
相手側を批判しても
ただのシーソーゲーム

ほとんどの正しさは
じぶんのいる
集団や信仰やイデオロギーの道徳を
プロパガンダしているだけ

世の中はほとんど
無意識に刷り込まれた
そのエネルギーで動いているから
批判してみても
火に油を注ぐだけのこと

おまえがわるい
おまえこそわるい
それが繰り返されるごとに
火の手は激しくなっていく

私も道徳的で正義なら
相手も道徳的で正義なのだ
正義と正義が同居するのはむずかしい

仲良くやっていくためには
火に油を注ぐシーソーゲームに気づき
できるだけそれに加わらないようにすること
参加せざをえなくなったときは
ロドニー・キングの言葉を忘れないことだ

mediopos-754
2016.12.9

■冨田恭彦『ローティ／連帯と自己超克の思想』（筑摩選書 2016.11）

「ローティの立場は、絶対的真理へと至る道を塞ぎ、私たちから希望を奪うものだと言う人がいます。しかし、絶対的真理に依拠しようという考え自体、二つの面を持っています。

もし絶対的真理だと信じているものがあって、その内容を語ろうとしますと、その場合には、私たちが信じていることを語ることにしかなりません。絶対的真理は私たちの考えとは独立に成り立っているものであるはずなのに、それを語ろうとすると自分の見解を述べることになる。としますと、私たちは絶対的真理の内容を具体的に語ることはできないことになります。結局自分の今の見解を述べることになるからです。

しかし、それでもなお絶対的真理の存在を主張するのであれば、そうした行為はせいぜい、いつかそこに到れると信じて、希望を捨てずに努力しようという、励ましの言葉でしかなさそうです。その意味では、全体的真理に依拠しようとすることは、私たちの希望とつながる面を持っています。

ところが、絶対的真理を標榜することは、実際には、極めて多くの場合、ある特定の考え方しか許さないという、人を抑圧する方向で機能してきました。絶対的真理の存在を主張する人々は、しばしば、自分たちの今の考えこそがそれであるとし、それとは異なる考えを圧殺しようとしたのです。」

「今私たちが当然と思っていることは、絶対的真理として天下ってきたものではけっしてありません。私たちに先立つ多くの人々の努力を通して、当然視されるに至ったものなのです。必然的に降ってきたものではないという意味で、それは偶然です。重要なのは、その偶然性の意識です。それが偶然であるために、なおさらのこと、私たちはそれを守るため努力しなければなりません。私たちには、「絶対的真理でないのなら空しい」と言っている暇はありません。ローティに代わって言うならそれは目前の問題から目を背け、あるいは他人事だと思っているからそうなのです。

人間の「自己創造」について、ローティはつぎのように述べています。

〔私の当面の〕目的は、予定された目標--あらかじめ何らかの仕方で設けられた目標--を目指すものとして人類の進歩を見るような見方を、消去することにある。私はそれを、種の自己創造としての--際限のない自己再定義としての--人類の進歩という見方に、取り換えたいのです。それゆえ、私は、よりいっそう正確な表象を与えるものとしてではなく、むしろ、よりいっそう有用な道具を与えるものとして科学を描き、人間本性のうちに常に存在してきた恒久的で深遠ななにかを表現しようとする試みとしてではなく、むしろ人間としてのよりいっそう興味深いあり方を与えてくれるものとして、芸術や政治を描こうとする。」

前に道はない
歩く道はじぶんでつくる
迷い立ちすくみながらも

正しい道はない
歩くのはじぶんだ
問いそのものが道となる

与えられた道は
歩む意味を持たない
教えられた答えは
問う道を閉ざしてしまう

問うかぎり迷うものだ
歩くかぎり迷うものだ
前に道はない
歩く道はじぶんでつくる

mediopos-755
2016.12.10

■ジム・ホルト『世界はなぜ「ある」のか？／「究極のなぜ？」を負う哲学の旅』（ハヤカワ文庫 NF 2016.11）

「私たちの宇宙はどこから来たのだろう？　宇宙の存在そのものが、何らかの究極的な創造力があることを示してはいないだろうか？　この問題を宗教信仰者に突きつけられた無神論者は、たいていふたつの反応のうちのどちらかを見せる。ひとつめとして、無神論者はこんなことを言うかもしれないーーーーそんな「創造力」を仮定するならば、その「創造力」自体の存在を説明する別の創造力を仮定する必要がある、と。言い換えれば、説明の連鎖が延々と続く。いわゆる「無限後退」の落とし穴にはまるだろうということだ。無神論者のふたつめの言い分は、たとえ究極的な創造力があったとしても、それが神のようなものと考える理由はないというものだ。なぜ、造物主が限りなく賢くて善良な存在でなくてはならないのだろう？　それに、なぜそれは心までもっていなくてはならないのだろう？」

「存在の謎の核心は、（･･･）「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」という問いに尽きる。」

「「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」という問いは、時代を超えた普遍的な問いのはずなのに、それを近代まで誰もはっきりと投げかけなかったのは不思議だ。」

「何世紀もたってから、ついにある人物が問いを提起した。その人物とは（･･･）ゴットフリート・ヴィルムヘルム・ライプニッツ。一九七四年のことだった。」

「「宇宙が、私であるという無比の性質をもつ存在を包含するようになったことへの驚きは、きわめて原始的な感情だ」と、ネーゲルは述べている。彼と同じように、私も自分が存在すること、すなわち宇宙が、私の意識の流れのなかで今湧き出ているまさにこの考えを生み出したことに、いくぶん驚きを感じずにはいられない。

だが、とうていありえないような自分の存在に驚きを感じる一方で、それと好対照をなす奇妙なことがある。私がまったく存在しないと想像するのが困難なことだ。（･･･）

現実の「何かあるという状態」が自分の存在にかかっているという感覚は、独我論的な幻想だとわかっている。しかし、幻想だと認めても、やはりそのような印象が抜きがたく残る。どうすればその印象を薄められるだろうか？　そのためには、次のような考えをしっかりと受け止めることが大切なのかもしれない。私が無意識の闇から突然生命に目覚めた思いも寄らない瞬間より前に、世界は長い年月にわたってなかなか首尾よくやってきたし、私がその闇に戻る避けられない瞬間が訪れたあとにも、なかなか首尾よくやっていくに決まっている。」

問いはつづく
世界の謎
私という謎
問いはぐるぐるとまわり
またはじめに帰ってくる

どのようにという問いには
さまざまが答えができるが
なぜという問いは
すぐに迷宮へと彷徨い始める

そしてなぜは封印されたまま
どのようににすり替えられてしまう
けれど封印されたとしても
決してその問いが消えることはない

無を恐れる者は
そこには意味が究極的に剥奪されていると
思い
無に抱かれているととらえる者は
無を因果を越えた母胎ととらえるけれど
無をつかまえたわけではない

なぜという問いの果てに
わたしというちっぽけな意識は
いったい何を見るのだろう
そして問いはぐるぐるとまわり続ける

mediopos-756
2016.12.11

■『ムジカ・ピッコリーノ／ピッコリーノ号が治したモンストロ達』（幻光社 2016.12）

「荒廃した風景がどこまでも続く大地。ここはかつて音楽の都として栄えた王国「ムジカムンド」。ムジカモンドの民は音楽を心から愛し、その魅力や多様性を大切にして暮らしていた。ところが１０００年前、大地を飲み込む巨大な嵐「テンペスタ」が発生。人々はやむなく地上を離れ、空中都市に移住した。」

「大急ぎで空中都市の建設が始まった。（･･･）万が一、計画が失敗したら、こよなく愛する音楽が永遠に失われてしまう。そのことを心配した人々は、空中都市の建設と同時に、音楽の記憶を宿した飛行機械「モンストロ」を開発した。音楽を後世に伝える「空飛ぶオルゴール」に未来への希望を託したのである。」

「しかし、思わぬ事態が起きた。永遠に飛び続けるはずのモンストロが、次々と地上へ落ちていったのである。（･･･）やがて音楽の記憶と共にモンストロは風化した。一方、空中都市の人々もモンストロのことをしだいに忘れていった。」

「数百年が経ち、人々が地上に降り立った頃、王国でモンストロを覚えている者はあらず、その存在は伝説の域を出なかった。しかし地上の開発が進むにつれ、モンストロと思われる部品や破片が次々と見つかったのである。王国の賢者たちは、古い文献を引っ張り出してムジカムンドの過去を研究。モンストロが、＜音楽の記憶装置＞だったことを突き止めた。その後、当時の王国の命により、モンストロを治療して過去の音楽を蘇らせる計画が発足。モンストロを再生させるには、音楽に関する厖大な知識と楽器を巧みに演奏する技術が必要だった。そこで王国はムジカアカデミーを創設、傷ついたモンストロを治療する技術者を養成した。＜モンストロを治療する医者＝ムジカドクター＞の誕生である。」

これまでに
どれほどの音楽が
奏でられ
忘れられ
失われたことだろう

音楽は常に
奏でられ
忘れられ
失われ続けている

音楽は
一度だけのうつろい
けれども
そのうつろいは切に
記憶され記録され
再現されようとするのだ

記憶され記録され
再現されている音楽も
やがては地上から
消え去ってゆくだろう

それでも
人のいるかぎり
音楽は切に
奏でられ
忘れられ
失われ続けるだろう
うつろうときのなかで
かぎりない永遠を求めながら

mediopos-757
2016.12.12

■大角幸枝『黄金有情／金工ものがたり』（里文出版 2016.9）

「金属にはほかの有機的な工芸素材には太刀打ちできない堅牢性と恒久性がある。儚さとは対極にあるこの性質に魅力を感じ、うつろいやすいものを永遠の存在に置き換え留めること、限りある命を永遠に託せる存在に意味を感じていることに思いいたる。」
「金属は人類史上、最も重要な工芸素材であるが、その色と質感を日本人ほど細やかに愛でて使い分けた民族はほかにないのではないかと思われる。それは金銀においてことのほか優美に用い分けられている。特に箔や粉に仕立てた金銀が各種の工芸美術分野で用いられる時は格別である。」
「古来、工芸素材として金、銀、銅、鉄、錫が一般的に用いられたが、これらを総称して「五金」と呼ぶのは中国からの伝来であろう。日本では昔から金属を色味で呼び慣わしており、これらの五金をそれぞれ、こがね（黄金）、しろがね（銀）、あかがね（銅）、くろがね（鉄）、あおがね（錫）という。（･･･）
　金属固有の特性である展性、延性、および粘性は、程度の差こそあれ、この五金に備わったもので、それぞれの特長を生かして、人類はさまざまな生活用品や荘厳具、武器などを作り出してきた。それらを作るための古代の人たちの苦労と知恵を考えると気が遠くなるような思いがする。（･･･）
　精錬され打ち延べて磨かれた金属の、見た目の一大特長は、鏡のような光沢と輝きである。実際、人間が自らの姿を映すために発明した鏡は、長い間、金属で作られていた。それ以前の最初はナルシスも覗き見ていた水鏡、次に石の鏡がある。」
「人間にとって金属の正確には聖性と俗性がある。特に金においてそれは著しい。金属の輝きこそ、荘厳な宗教的空間や豪奢を好む高貴な人々の九十空間を創出するのにふさわしい。聖なる神の家、境界の内部は壮麗な天上世界を黄金色で表現する。また寺院の伽藍には人間を極楽に導く金堂があり、内部の荘厳には必ず金色が用いられる。（･･･）一方、金属は明快に世俗の階級を表す。オリンピックの賞に用いれっるメダルの金、銀、銅は最もよく知られた順位を表す良い例だ。」
「素朴な彫金細工もないではないが、概して装剣金工や彫金小金具をはじめとする細工物の美意識はひとえに稠密、迫真、精妙を旨とする世界である。（･･･）昔は今ほど明かりも充分ではなく、虫眼鏡もなかった時代に、どうしてかくも微細な仕事ができたのかと不思議に思う。昔の人のほうが目が良かったのかもしれない。自然観察の鋭さも現代人には及びもつかない、しかし、それだけでは理屈が通らない。洞察眼と手技の連動が比類ないものであったと思わざるを得ない。（･･･）
　古代の仕事と近代の仕事を比べると、同じような稠密さであるにもかかわらず、雰囲気が全く違うのに気が付く。日本の明治と西欧近代の仕事は、形態も意匠も違うが、私にはその雰囲気が似通って見える。それは手技とは思えないような、力み返った名人芸である。技術は冴え渡り、完璧であるが、古代の仕事に共通する無心の祈りにも似た真摯な一途さや、優雅な手仕事に時間をかける楽しさが伝わってこない。科学と経済が発達し、人間が神を凌駕したかに見える時代には、物作りの姿勢も違っていることの証左ではないかと思う。こんなところにも時代の気分は如実に表れる。」
「先進諸国の工芸は生き延びる道を求め、あるいは存在意義を求めて生活の現場から芸術作品あるいは個人の楽しみの手仕事の領域にシフトせざるを得なくなった、というより自然にそうなった。芸術作品で食べていけるというのではない。工芸のアイデンティティは、もはや、と言うべきか、もともとと言うべきか、そうしたところにしか存在しないのではないかと思う。
　高度に発達した工業文明社会に暮らす私たちには人間性回復のパワーを生む精神的糧としての工芸こそが必要なのだ。用を捨てた工芸はそのひとつであると私は解釈している。見方を変えれば、かつて王侯貴族の楽しみであった美術工芸品や作家ものが庶民の楽しみのレベルにまで敷衍しているということだ。各種の展示会が、宣伝が行き届いているとはいえ、盛況であることがその辺の事情を示している。
　今ではいろいろな分野で伝承不能になってしまった技も少なくないけれども、天然記念物のようなあり方にせよ、まだ人の手というものに愛着と執念を持ち続けることができるということは、究極の人間性の証左ではないかと思う。我が身を振り返れば、創作で食べていくのは至難であるが、それでも作る楽しみへの執念が衰えないからこそ、とりあえず何とかして制作を続ける。およそ手を動かして何か作るという所作は、遠い昔、二本足で立ってほかの動物と決別した時から、人は「ものつくり」の生を生きる宿命を負ってきたといえるのではないだろうか。
　人類が電脳社会を構築しつつある現代は、第二の美術工芸運動が起こる気運をはらんでいると思う。それはかつての機械文明に抵抗するものではなく、手仕事の効用を人間性の回復という視点で捉えるものである。」

手はつくる
ものをかたちに
見えないものを見えるかたちに
見えるものを見えないかたちに

手はつなぐ
俗なるものと聖なるものを
うつろいと永遠を
わたしとあなたを

手は祈る
かぎりある手を合わせ
かぎりなきものへ
わたしそのものを捧げるように

mediopos-758
2016.12.13

■吉田篤弘　文・フジモトマサル　絵『という、はなし』（ちくま文庫 2016.12）

（「背中の声」より）
「書いているとき、いつでもすぐ後ろに読者がひとりいて、一行書くたび、何ごとかひそひそと囁きかけてくる。
「ああ、それは違うな」
「その表現はおおげさでしょう」
「漢字を間違えている」
「説明不足だね」
「なんと、ひとりよがりな」
　ーーーー等々。」
「持つべきものは背中の声である。」

哲学が対話からはじまるのは
二人の自分が生まれているからだ
言葉が鏡に映されて自分に返ってくる

かつて声は神々からやってきた
神々からは啓示がくだり
その神託に従って行動を決めた

けれどそのうちに
人は自分のなかに
神々を住まわせるようになった

という、はなし
がある

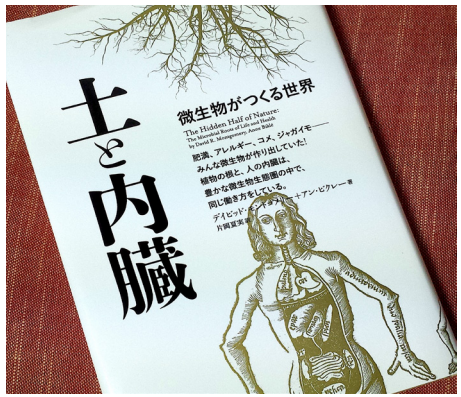
ときには
勝手させてくれよ
なんて思うけれど

でも
持つべきものは
もうひとりの自分である

誘惑するのも
もうひとりの自分
なのだけれど

mediopos-759
2016.12.14

■デイヴィッド・モンゴメリー＋アン・ビクレー『土と内臓／微生物がつくる世界』（片岡夏実訳／築地書館 2016.11）



「微生物が土壌の健康と人間の健康の両方に果たす、きわめて重要な役割の類似が明らかになった今、私たちの世界を見る目は変わらずにいられない。足元にある隠された自然の半分を見ることは依然できないが、それが日々庭で目にする生命と美の根本であることを、私たちは知った。」

「腸内細菌バランス異常は、数々の病気の主な原因として、現在研究されているところだ。そうした病気には、肥満、ある種のがん、喘息、アレルギー、自閉症、循環器疾患、一型および二型糖尿病、うつ、多発性硬化症などと共に腸管壁浸漏症候群や炎症性腸疾患が含まれている。腸内細菌バランス異常と疾病に相関関係があり、因果関係も明らかになってきたことでどのような結果になるのか、はっきりしたことは誰にも言えない。ただ、マイクロバイオームの探究が、さまざまな現代病を治療する可能性ーーーーそこには農業用化学製品への依存を断つことも含まれるーーーーへと道を開こうとしているのはたしかだ。」

「植物やヒトの健康への伝統的なアプローチの中には有効なものがある理由を、私たちは今、知りつつあるところだ。それは、土壌や体内の共生関係の要となる有益な微生物相を支えるからだ。これこそが、土壌生物相が餌となる有機物を十分に得ているかどうかが重要な理由、そして大腸という錬金術の大釜に、生命をあふれるばかりに保つような糖質を摂るべき理由だ。（…）人間の内なる土壌にマルチをかけることが、健康と不健康の分かれ目となりえるのだ。

　有益な微生物を傷つける愚行は私たちにつきまとい、元々の問題を解決することなく新しい問題を作り出してしまう。これはまずい戦略の特徴だ。土壌有機物を焼き尽くして有益な土壌生物を飢えさせる行為は、不毛の地を遺産として残してきた。同じように、植物性食品が不足し抗菌物質を多く含む食事は、私たちの内なる土壌を脅かす。あまりに長きにわたし、私たちは生物相を科学的栄養と毒物に置き換えようとしてきた。」

「多くの人は自然を、肉眼で見えるほど大きな植物や動物のことだと思っている。私たちもまだこの傾向を手放していない。木を見るとき、私たちは天に伸びる枝、青空をバックにした葉の色や形を見る。しかし心の目ではもっと多くの、以前は隠されていたものを見ている。私たちは一人ひとり独特の存在であっても、孤独であったことはない。私たちの足元深く、そして私たちの身体全体に、自然という大木の中の大木が生きた根を下ろしているのだ。自然は遠く人里離れた土地にあるのではない。それは想像以上に、まさに私たちの中にあるのだ。」

害をなくし健康になろうと
菌を殺し続けることで
人は自分を殺している

便利で豊かになろうと
精神を殺し続けることで
人は自分のほんとうを殺している

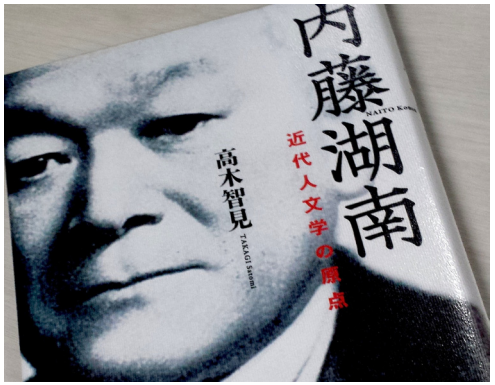
脳と腸は照応し
生きた食べものを殺せば
生きた思考も殺してしまう

天と地は照応し
精神をなくしてしまえば
生きたかだらも殺されてしまう

からだにじぶんを閉じ込めたら
ゾンビになったようなものだ
天の響きは聞こえなくなるだろう

mediopos-760
2016.12.15

■高木智見『内藤湖南／近代人文学の原点』（筑摩書房 2016.11）



「湖南の文章は、湖南がその誠意を尽くし、恕の精神を最大限に発揮していたからこそ面白いのである。両者のうち、早期湖南の面白さの理由である誠意は、言うまでもなく、『中庸』や『孟子』が強調する、人として最も肝要な心のあり方、処世の道であり、孔子も同じことを、「篤く信じて学を好み、死を守りて道を善くす」（泰伯）、あるいは「内に省みて疚しいことがなければ、憂いも懼れも一切なく、それが君子の証である」（顔淵）などと表現している。また湖南の面白さのいまひとつの理由は、古人（他者）は、現代人が己の価値観を一方的に押しつける形で理解されることを望むはずがない。それ故、古人が欲せざる観点ではなく、古人が望む古人の立場で理解すべし、という歴史認識に不可欠の態度、すなわち恕の実践にあった。言うまでもなく、恕とは、「己の欲せざる所を、人に施すことなかれ」（衛霊公）ということであり、人が終身の間、実行すべしと孔子が力説した徳目である。」

「誠とは何か。理想主義としての儒家思想の最大の弱点は、自らを律する基準や規制力が、自分自身の心の力でしかないということである。そのため儒家思想では、自らのたえざる努力、克己を要請し、常に自己を失わず裏切らないように、自分自身と闘うことが必要になる。自らと戦い己を裏切らず、理想を貫徹しようとする心が誠である。

つぎに恕とは、他者を責めることなく、そのまま認めることである。中国の碩儒・柳詒徴『中国文化史』によれば、人が自らの人格寛政のために終身行うべき道は、まさに恕であり、それにより人間関係のあらゆる不徳が解決できるという。（･･･）

儒家の目的は、「修己治人（己を修め人を治む）」、すなわち、まず自分自身の人格を確立して（修己）、それを他者に及ぼし他者を君子にすることにある（治人）。修己は誠によって可能となり、それを踏まえての治人は恕によって実現する。この意味において、湖南はまさしく孔孟の徒、儒者であったのであり、文筆において修己治人を実践していたのである。かくて湖南の面白さは、孔孟の徒としての湖南が、儒家思想の最も根底にある誠意を尽くし恕の精神を発揮したからこそ可能となったのであり、我々がそれらを希求しているが故に、面白く感ずる、という結論を導くこととなった。」

批判のための批判は
意識魂ではない
意識魂はまず
己を見ることからはじまる

誠は言葉を成さねばならない
言葉はみずからを欺いてはならない
恕は己に照らさねばならない
己を欺いて他に対してはならない

相手が弱者でも強者でも同じこと
弱者を弱者として同情するのも
強者を強者として批判するのも
意識魂なき者の営為にすぎない

意識魂は自由を求める
自由はまず己を照らす
他を変えようとはせず
己をまず修めようとする

mediopos-761
2016.12.16

■高橋英夫『音楽が聞こえる／詩人たちの楽興のとき』（筑摩書房 2007.11）

「詩でも小説でもいいけれど、読んでいるうち感興が高まり、読みが調子にのり、はずみがついたと思うときがある。言葉が美しい、描写があざやかだ、緊張度が増してきた、これらの思いにまざって、ああこの感じは音楽なのだ、この一節、音楽が鳴っているみたいだと言いたくなる場合もある。それは読み手自身がもっているであろう音楽性と作品に内在する音楽性のあいだで､偶然なのか波長が合ってしまったということだろうか。それともどちらか一方の音楽性の水位が高まり、溢れ出して、もう片方に伝播、感染しはじめた結果なのだろうか。そのどちらであれ、言葉と音楽とは相性がよいのはどうも本当のようだ。

　理屈めかしていうと、音楽は言葉に内在しているのである。実は何にでも内在可能なのが音楽で、風景にも内在すれば、人間という生きものにも内在しているが、いまは言葉にかかわる音楽ということに話を限ってみよう。あいにくそれは手づかみで外に引きずり出すことはできない。そんなことをしたのでは空漠とした感じになるだけで、失敗する。雲をつかむような無謀だ。」

「言葉はその本源のものに帰らなければならない。言うは易く、行うは難いけれども。ものに到達したらそれは感動だ。ただそれは感じとることによってしか証明できない。この本源のものに到達したという感動が､中也にあっては「いのちの声」となり､「歌」というものになった。それが最終的な意味での中也の音楽だった。この意味で、中也の詩はいたるところに音楽が溢れ流れている。」

鳥は音楽から生まれたのだろう
鳥からは音楽が聞こえるから
音楽の聞こえない鳥は
空をなくした大地のようだ

言葉は音楽から生まれたのだろう
言葉からは音楽が聞こえるから
音楽の聞こえない言葉は
涸れた川のようだ

人は音楽から生まれたのだろう
人からは音楽が聞こえるから
音楽の聞こえない人は
奏でられない楽器のようだ

世界は音楽から生まれたのだろう
世界からは音楽が聞こえるから
音楽の聞こえない世界は
死に絶えた惑星のようだ

mediopos-762
2016.12.17

■戸川純『戸川純全歌詞解説集／疾風怒濤ときどき晴れ』（P ヴァイン 2016.12）

（「ヒト科」より）

「「ヒト科」ーーーーつまり、昆虫に対しての「ヒト」ですね。かつて、耐えきれないつらさに耐えるために、何も考えない虫になることを望んだけれど、いま、ヒトのままでいようとする意志、ということなのかな。「本能の少女」なんかでも、傷つかないために虫を見習おう、本能に任せようとか言ってましたけど、ここでは「ヒトであること」を肯定しているんです。（･･･）

昔は自分がヒトであることが、弱い感じがして、ブルース・リーの「考えるな、感じろ」みたいなことを思っていたのだけれど、私、このころに別の歌詞も書いてるんです。「ヤプーズのテーマ２」。当時、メンバーが６人いたんですが、「考えろ、考えればわかり　あたしらは６本の考える葦」っていうんです。

虫を喩えに出していた時は、人間でいることがつらくて、虫になれたらどんなに楽だろうと思った。なぜ人間の方が虫よりつらいかといったら、それは感情に振り回されるからだけど、それを引き受けようと思ったんです。さらに、「欲や煩悩で動物の頂点に立った」人間にも、いいところがあるじゃんと。

私にも成長というのものがあったかな。成長というより変化かな。ここで初めて私は、「ヒトの女」になった。「蛹化の女」は一人感そのものでした。「ヒト科」では、自分一人のことでなく、人類の中の一人として自分を見てる。そういう表現というのは、今までとは違いますね。

そもそも私は唯一無二の存在でいたかったわけじゃない。気が付いたら一人になっていた。誰にも似ていないものになってしまっていた。でも、ヒト科としてみればなんとかなる。人類の中に、躓いたり傷ついたりしたヒトもたくさんいたろうけれど、乗りこえても来ただろう。偉人だけじゃなく、名もないヒト、民が、たくさん乗りこえてきた。それがヒト科である。絶望しても、虫のような本能ではなく、考える人だから、頑張れたんじゃないか。ヒトとして粘ったんじゃないかと。

虫でいるうちは諦念だったけど、ヒトになった時、希望が湧いた。人間であることを喜ぼうという気持ちが、自分に湧いたんです。」

人になったのは
人でいようと思うようになったのは
人でいることの意味に
ようやく気づいてからのことだ

なぜ人なのか
人でなしのほうが
もっと救いようがある
そんなことばかり考えていた

人の激しい感情は洪水になって
そのなかで溺れそうになった
ほんとうは感情の器が小さすぎて
すぐに溢れ出てしまうからだったのだ

思考も同じだった
器があまりに小さく
訪れてくる思考を
受けいれられないでいたのだ

器が小さければ
大きくすればいい
それだけのことに気づくために
ずいぶん時間をかけてしまった

人を超えて人になればいい
ようやくそう思えるようになった
過剰なまでの制約ゆえの自由こそが
人の存在理由なのだから

mediopos-763
2016.12.18

■辻井達一『湿原力／神秘の大地とその未来』（北海道新聞社 2013.3）

「仮に湿原が消滅した場合、気候変化はいきなり地球規模的にはならないだろうが、地域的には降水量の減少や降水時期の大幅な変動を引き起こすだろう。インドネシアなどを中心とするラニーニャ現象による地域的な降水時期の変化がいい例なのだ。

もう少し小さい、局部的なスケールの変動としては、湿原の抱えている水量、泥炭に含まれている水分量がなくなったとしたら、周辺地域の年間気候変化（特に冬の気温低下）が生じると予想される。高緯度地方ではもっと寒くなるだろう。それを他の熱源でカバーするのは大変だ。」

「湿原は森林とともに有機鉄イオンを生成してそれを海に流しているのだが、湿原が失われたり、機能不全に陥ったりすると、それができなくなる。湿原の水によく浮いている赤錆のような油膜がそれで、あんまりきれいなものには見えないけれど、海にとっては極めて有用なものなのだ。よく「磯焼け」という言葉が聞かれるが、海の中の岩に白っぽい地衣類のようなものが着いていることがあり、それは石灰藻類がくっついた状態を指す。これが着くと、そのほかの藻類、たとえば昆布などが着きにくくなるので、そういう状態が磯焼けなのだ。

湿原が生成し海に流し込む有機鉄イオンには、その石灰藻類の生育を止める効果がある。つまり磯焼けを防止するわけだ。それに着目して、一種のマットに有機鉄をくるみこんで海に設置する方法で、磯焼けを積極的に防止する手法も開発された。しかし、そもそも湿原が自然に持っている力をそのまま利用すれば一番いい。これも湿原の存在効果である。日本のように海藻をさまざまに使う国では、それらが自然に十分に生育するように考えることが大切だろう。

もう一つ、もしマングローブ湿地などを含む沿岸のラグーンが失われることがあったらどうなるか。

マングローブ湿地は、地球上でもっとも富栄養性の高いところとして知られている。そこに集まっている泥は、見た限りではなんだか汚らしいように見えるが、栄養物の塊で、多くの小魚やカニや小エビや貝類の生産を支えているのだ。多くの水鳥たちもここに集まる。そして、それらは鳥たちだけでなく、地域に住む人たちにとってもかけがえのない蛋白源を供給してくれる。(…)

高山帯にある湿原の消滅も、大きな難問だ。それらは面積はずっと小さいが、それでもそれに依存する多くの生物たちの生存を左右することになるはずだ。かなりの数の高山昆虫類、渓流生物、湿原性の植物、動物たちが影響を受け、消滅することは避けられない。」

湿原は神秘の大地
湿原が失われれば
多くのいのちが
失われてしまうだろう

その源の力で
水は豊かに蓄えられ
さまざまないのちは育まれ
森とともに海を潤している

霊性は神秘の大地
霊性が失われれば
多くの魂が
失われてしまうだろう

その源の力で
精神は豊かに蓄えられ
さまざまな魂は育まれ
星とともに天地を潤している

mediopos-764
2016.12.19

■加藤真『生命は細部に宿りたまう／ミクロハビタットの小宇宙』（岩波書店 2010.10）

「森や草原、磯や干潟といった特色ある自然の広がりを生態系とよび、特定の生物が利用している空間的広がりを生息場所とよぶ。環境への選好性が特別に高くはない生物や、行動圏が広い生物では、生息場所はほとんど生態系に重なる。オオカミは森林を、オミナエシは草原を、アユは川を、アサリは干潟を、それぞれの生息場所としているように。

しかし、もっと小型の、移動性の低い生物に注目すると、それらの生息場所を表現するのに、右記のようなくくり方では粗すぎることに気づかされる。たとえば、鎮守の森の二抱えもあるようなモミの巨木の樹冠の枝には、寄生生物のマツグミが着生するし、暗い林床のその根元にはモミタケが出て、さらにそのきのこに集まる虫がいる。モミの枝の中にはオオトラカミキリの幼虫が穿孔し、木の幹から流れ出る樹液の中には酵母などさまざまな微生物が生息している。わたしたちの視線では見落とされがちな自然の単位が、生態系の中には数多く存在しているのであろう。小さき生物たちが利用している特殊な微環境はミクロハビタット（微小生息場所）とよばれている。鳥の目で見下ろせるような大きな生態系それぞれの中に、あるいはそれら生態系の境界に、多様なミクロハビタットが存在しており、そのようなミクロハビタットの多様性が景観レベルの生物多様性に大きな貢献をしている。しかとは見えないさまざまな生物が共存する世界に、わたしたちは強い畏敬の気持ちをもっていて、その直感に忠実に、鎮守の森や御嶽の森を残してきたのだろう。

海に鎮守の森はないが、海にもさまざまな神が住まわれている。沖に屹立する岩はしばしば神の依代であったし、御嶽に骨が祀られているジュゴンはニライカナイから訪れた神でもあった。沖縄の辺野古の海にジュゴンが生き残っていることは奇跡に近いが、ジュゴンの生息は、その餌場である海藻藻場の自然の健全度を象徴的に示している。この海藻藻場のウミヒルモ群落の砂の中から発見された小さな二枚貝は、ザンノナミダという名で記載されたが、このような小さな生物をはぐくむミクロハビタットの偉大なる集合が、珊瑚礁生態系の生物多様性である。辺野古の海を埋め立てて空港をつくるという計画は、沖縄の神としてのジュゴンと、珊瑚礁生態系の生物多様性と、ジュゴンに琢された沖縄の未来の可能性を、葬り去ることになる。」

ミクロでは見えない
マクロがあるように
マクロでは見えない
ミクロがある

生物たちの生きている場所
生きることのできる場所
生態系よりもずっと小さい
ミクロハビタット
移動しない生物たちの
局所的な生物圏

マクロでは見えないその多様性
その小宇宙の広がりが
自然界の深みを支えている

その多様性が壊れてしまえば
見えないところから
生物の可能性も失われていく

人にもまた
生態系の多様性があるだろう
移動しながらも生きてゆける人
移動することでは生きてゆけない人

マクロとミクロは
互いに支え合ってこそ
宇宙はその多様な豊かさを
開花させてゆくことができるのだ

mediopos-765
2016.12.20

■ブルータス８３８　2017年1月1･15号『危険な読書／人生変えちゃうかもしれないあの1冊。』（マガジンハウス 2016.12）

「すべての本は危険性をはらんでいる
読書が危険になりうるのは内容の過激さにあるのではない
悪徳の書であっても毒にすらならないこともある
その本をどう読むのか
主体は読み手にあり、時には飛び込むような勇気すらが求められる

ただ共感を得られることを目的とせず
これまで当たり前に思っていた価値観を崩壊させ、考え方やモノの見方を一変させる
心を激しく揺さぶる読書こそがいま求められる

ある歴史学者言った

我々ホモ・サピエンスは創造力を駆使し
「虚構」をつくりあげることでこの地球を支配した

こうも言えるのかもしれない

読書は我々が思いを巡らせる能力をより強固にし、それがたとえ一冊であっても
世界をまったく違うものにできる可能性を秘めている」

読書の危険は３つ

世界を止めること
創造を疎外する守り

世界を壊すこと
目的とされた無秩序

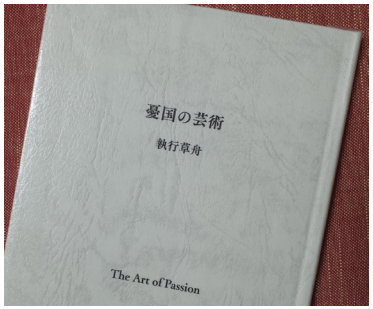
世界を壊しまた止めること
同じ罠にまた陥る

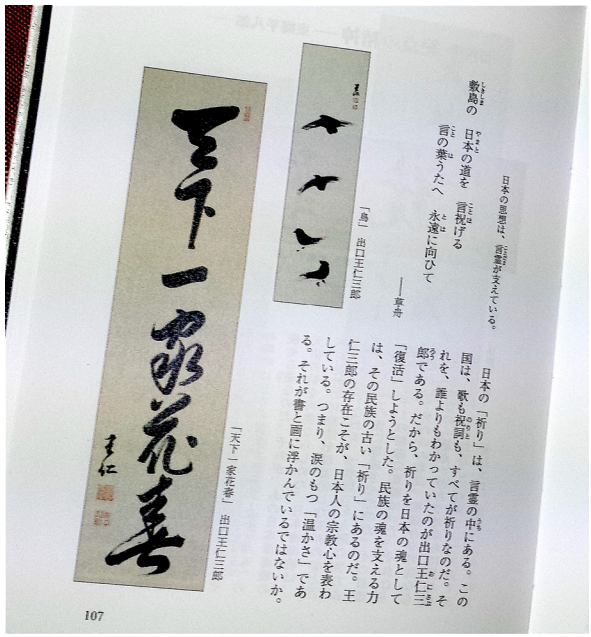
信仰は避けねばならない
みずからを縛る縄や
閉じ込める檻などにしないこと
そして道具は有効に使うこと

読書なんて多寡がしれている
とはいえ多寡がされどにもなる
妄想にもなると思えば
瞑想にも祈りにもなるからだ

mediopos-766
2016.12.21

■執行草舟『憂国の芸術／ The Art of Passion』（講談社エディトリアル 2016.9）




日本の思想は、言霊が支えている。

敷島の　日本の道を
言祝げる
言の葉うたへ　永遠に向ひて
——草舟

「鳥」　出口王仁三郎

「天下一家花春」　出口王仁三郎

日本の「祈り」は、言霊の中にある。この国は、歌も祝詞も、すべてが祈りなのだ。それを、誰よりもわかっていたのが出口王仁三郎である。だから、祈りを日本の魂として「復活」しようとした。民族の魂を支える力は、その民族の古い「祈り」にあるのだ。王仁三郎の存在こそが、日本人の宗教心を表している。つまり、涙のもつ「温かさ」である。それが書と画に浮かんでいるではないか。

107

（「第三回　国士の涙ーーーー頭山満・出口王仁三郎ーーーー」より）
「日本の「祈り」は、言霊の中にある。この国は、歌も祝詞も、すべてが祈りなのだ。それを、誰よりもわかっていたのが出口王仁三郎である。だから、祈りを日本の魂として「復活」しようとした。民族の魂を支える力は、その民族の古い「祈り」にあるのだ。王仁三郎の存在こそが、日本人の宗教心を表している。つまり、涙のもつ「温かさ」である。それが書と画に浮かんでいるのではないか。」

王仁三郎の温かさは
涙のもつ温かさである

日本の魂であって
日本を超えている魂である

祈りも日本の祈りであって
日本の祈りを超えている

復活は日本の復活であって
日本の復活を超えている

憂国は憂国を超えねばならない
国などという境を超えねばならない

魂を
祈りを
偏狭な日本なぞに
閉じ込めてはならない

王仁三郎の祈りは
日地月に星の胡麻をかけた
宇宙の祈りである

mediopos-767
2016.12.22

■郡司ペギオ幸夫『いきものとなまものの哲学』（青土社 2014.1）

「いきものは死んでいく。死んだことによって、我々は、どこかへ行くと感じ、生まれることで、どこかからやってくるように感じる。それは、自分と他者との関係でもある。他者が自分の世界に現れたとき、我々はそれを発生したのではなく、やってきたと知覚し、自分の世界から消えたとき、消滅したのではなく向こうへ行ったと感じる。他者がやってくる場所、他者が消えていく場所はわからず、原理的に問い得ない。他者とわたしとの関係は、生と死との関係と重なり、我々はそのような断絶の中を生きながら、断絶の外部と接続していることを感じる。

同時に死んでいくことは、何かのたべものとなってしまうことでもある。いきることが失われ、なまものとなって、たべものになることは、断絶の間に流動があることを意味する。この流動に断絶を見出せないなら、様々な生物は、食う・食われる、の序列関係をもって配列される。我々はそこに、いきものが維持されるための資源が流動している様をみるだけだ。ここに見出されるのは、食う・食われる関係を無際限に展開したフラットなネットワークだ。ネットワークの一点に位置するわたしから出発して、ネットワークを移動していっても、どこまでも同じ光景が展開されるに過ぎない。そこには、向こう側、わたしの外部が見出されることは決してない。対して、「いきもの」が「なまもの」となり、「たべもの」となって流動に組み込まれるとき、食う・食われる、の関係は、断絶の中に、いってしまい・やってくる場所ーーーー向こう側、を指し示す。この、向こう側の潜在において、食う・食われるの関係は、断絶の中の接触、断絶に抗う流動を立ち上がらせ、食うものーーーー否定するもの、の宙づりを実現する。それは、否定の否定であり、死んで他個体に食べられることで、群れを維持し、生きていくものだ。その一つ一つには、世界と断絶しながら見えない向こう側を指し示す、いってしまう・やってくる、延長が潜在している。」

いきものは死んで
からだはなまものとなり
たべものとなる
たべるものもまた
からだはやがてたべものとなる

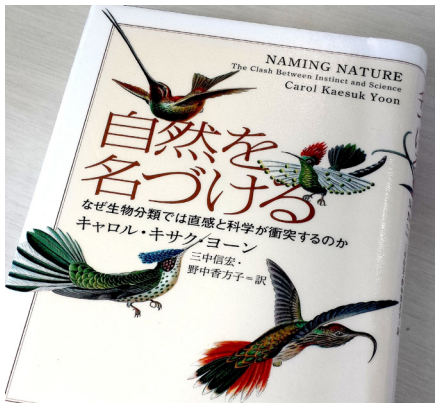
わたしはどこかからやってきて
やがてどこかみえない向こう側へゆく
せかいはどこかからやってきて
やがてどこかみえない向こう側へゆく

からだはいまここにあり
せかいはいまここにある
わたしはやがて
たべものとなるからだを去って
どこかみえない向こう側へゆく
せかいにはわたしというたべものが残されるけれど
わたしのせかいもまた向こう側へゆくだろう

こちらがわと向こう側には
断絶があるのだろうか
流動があるのだろうか
向こう側のわたしはなにをたべ
また別のたべものともなるのだろうか

mediopos-769
2016.12.23

■キャロル・キサク・ヨーン『自然を名づける／なぜ生物分類では直感と科学が衝突するのか』（三中信宏・野中香方子訳 ＮＴＴ出版 2013.9）



「科学は確かに独自のやり方で生きものの体系化を推し進めた。分類学者たちは一貫して証拠を探し求め、生物のＤＮＡの配列情報をつなぎ合わせ、鱗や羽や花弁や葉を綿密に観察した。そのうえで、進化史のみに基づく生物分類を構築した。精密で明確に定義され、いっさいの異物を除去したこの分類はわざとそういう制約のあるやり方を採用したのである。進化的に分類することにより、科学者はこれまでは考えられなかった世界中の生物を理解することができるようになった。これを勝利といわずして何と言えばいいのか。しかし、それしか道はないと考えてしまったのはわたしの間違いだった。科学の向こう側に目を向ければ、生き物の分類にはまだやるべきことがたくさんある。わたしは視野が狭かったので、生物界に立脚して生きものを分類し命名するという行為は科学の専有物からわたしたち自身に取り戻すという道があることを見逃していた。わたし自身もまた環世界センスを見失っていたということだ。

「私が信じるように環世界センスが実際にその威力を及ぼしているならば、種としてのわたしたちが地上の生きものの分類体系に関してある特定の見方を共有しているならば、分類学の歴史は他の科学にありがひな着実な概念的洗練と技術敵進歩の物語として理解することはできないだろう。それはリンネの最初のひらめきから始まり生物の体系化のためのよりすぐれた段階へと進む合理的な進歩の道のりではありえなかった。わたしたちの祖先が進化によって獲得した環世界センスのレンズを通して生物界を見ているのならば、分類学の歴史はむしろ大昔から連綿と続くまったく非科学的な伝統のところどころに科学の営為がさしはさまれてきら歴史であると解釈しなければならないだろう。それはヒトにとってもっと奥深い根幹に発する内なる生命観に突き動かされた学問領域が現在までゆっくりと歩んできた苦難の道とみなすべきものに違いない。」

私たちは自然を名づけ
世界を理解しようとしてきた

分けることで
分かるように
分類することで
類別できる

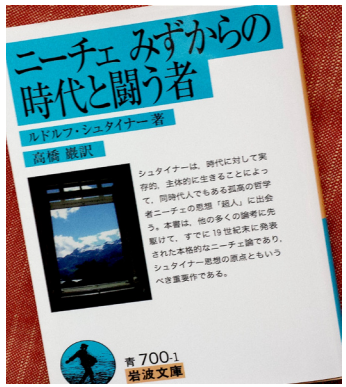
科学という強力なものさしは
私たちのさまざまなものさしを
葬り去ってしまいかねないが
私たち自身の生きたものさしを
手放してしまうわけにはいかない

分かることで
分からなくなる
分類することで
類別できなくなる

私たちは科学以前にも自然を名づけ
世界を理解しようとしてきたのだから

mediopos-770
2016.12.24

■ルドルフ・シュタイナー『ニーチェ　みずからの時代と闘う者』（高橋巌訳・岩波文庫 2016.12）



（高橋巌「解説」より）
「『神智学』（初版一九〇四年）を世に問うた頃のシュタイナーは、基本的にニーチェと同じ立場に立っていたから、どんな子も肉体を強化する権利があるように、どんな人も魂を強化する権利がある、なぜか、『私はなぜ、と問いかけられるような存在ではない』（『ツァラトゥストラはこう語った』第二部「詩人たち」）という、いわばマクス・シュティルナーの「個体主義的アナキズム」の側に立っていた。しかし『神秘学概論』（一九一〇年）では、すでに個人の存在の問題ではなく、自と他、人間と宇宙の関係の方に中心が移ってくる。一九一〇年代、特に第一次世界大戦が勃発する前後から、「技術と産業と営利主義」による地球の破滅への危機感が、シュタイナーの思想を、魂の強化以上に、すべての人の魂に宿っている「キリスト衝動」を意識するために役立たせようとするようになった。つまり、みずからの時代と闘うのではなく、みずからの時代を自分の運命として引き受け、その運命に自分を溶け込ませようとする。」
「第一次大戦中、シュタイナーは本質的に生き方を変えたような気がする。あくまでも気がするだけなのだが、この感情の力で、個人としての人間存在の問題から、自他の一致というか、社会と自分との、仏教でいう「相即相入」の世界へと入っていった。このことは、一九一四年秋から一九一八年にかけてのシュタイナーの言説の中に繰り返して現れてくる。
　例えば神秘学の認識にとって非常に重要な講義『オカルト的な読み方と聴き方』（『内面への旅　シュタイナー・コレクション２』筑摩書房）の中心のテーマは、次の言葉によく示されている。ーーーー「霊界を生きるときの経過は、人間がいわば自分から抜け出て、他のものと一つになることなのです。…… 自分を一つにするだけでなく、自分を他の本性の中へ変容させるのです。…… そうできるための良い準備のひとつは、この世で私たちを取り巻いているすべてのものに愛を持ち、関心を深めよう、と繰り返して試みることです。周囲のすべての愛を向けることが、神秘学を志す者にとってはどれほど重要なことか、口ではとても言い表せません」「概して人間は、もっぱら自分自身だけの関心を示しています。これは当然と言えば当然です。実際、それを信じようとしないとしても、人は自分自身だけに関心を向けています。たとえ他の何かにどれほど愛情を注いだとしても、本来他のものには最小限の関心しか示さず、自分自身だけの最大限の関心を示します」」
「今地球も人類も社会も、崩壊過程を辿っている。従って当然個人も同じ運命を辿っている。しかしこの破滅の流れに反対して働く別の衝動もまた、時代の流れに合流して働いている。この別の衝動は私たちを運命に対して無意識にしておかない。そして私たちを自然必然性の中に組み込ませまいとする。そして、「外なる物質として存在しているものを、霊的、魂的なものとして認識できるようにする。そのことが今、私たちの問題になっているのです。」（『ミカエルの使命』より）」
「先ず課題となるのは、鉱物界、植物界、動物界に帰依の心で向き合い、その中に自分を融合させることなのだが、世界の諸現象への帰依が深まれば深まるほど、魂の中で内的平静の気分が確かなものとなり、迷いがなくなる。そして他者に変容しようとするとき、私たちは自分のことを、今変容しようとしている他者ほどには価値がないと思っているので、自分を高慢にさせない。逆にどんな動物、植物、鉱物を眼の前にしても、その一つひとつの対象のすがた、かたちが自分の意識を超えて、自分よりもはるかに尊いもの、美しいものに見えてくる。外の世界のすべてが、相貌として、

人は人を超えてゆかねばならない
そうすることで人にならねばならない

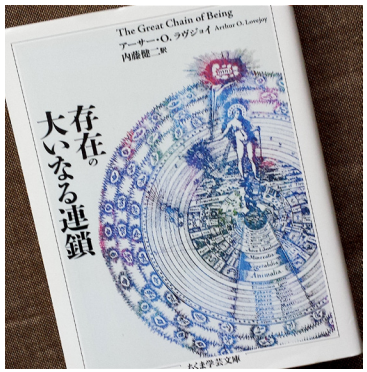
人になるということは
自分であることで自分を超えてゆく
ということなのだから

そうすることではじめて
動物へ植物へ鉱物へと向かうこともできる
それらのなかにあって響き合うことができる
響きそのものとなることができるのだ

人は宇宙から生まれた
宇宙の響きのなかから生まれた
そしてひとりの響きとして人となった
そうすることで宇宙の響きに加わるために
いちど分かれたものがもう一度結ぶように

mediopos-771
2016.12.25

■アーサー・O・ラヴジョイ『存在の大いなる連鎖』（内藤健二訳　ちくま学芸文庫 2013.5）



「「存在の連鎖」という句を宇宙の記述のための名称に用いることは、普通には、宇宙の構造について特別で、意味深く、大変奇妙な性格が三つあると断定することであること、これらの性格は神の性質について或る観念を想定していること、この観念は、それ自身とは潜在的に対立してい（て、この対立は最終的には表面化す）る観念と数世紀にわたり結びついていたこと、故に西洋の宗教思想の殆どは自らの中に深い矛盾を秘めて来ていること、宇宙構造についての先の仮定に、もう一つ別の同様に広く受け容れられている善の観念とも相容れない。究極の価値についての仮説（これらの結果はローマン主義の時代に表面化する）が結びついていたこと、この価値観はまさしく「存在の連鎖」という句が意味しているものであるという信念と相俟って、悪の問題を解決し、宇宙の構造は理解可能な合理的なものであると証明しようとする真剣な試みの主な基礎となったこと、自然の構造についての同様の信念が初期近代の科学の背景に大抵あり、それゆえ科学の仮説の形成に色々の点で影響を与えたこと――――以上のいくつかの事柄こそ、私がやや詳細に示し説明しようと試みた一般的な歴史的事実である。」

（高山宏「文庫版解説」中のフィリップ・ウィーナー「存在の連鎖」（『ディクショナリー・オヴ・ザ・ヒストリー・オブ・アイデアズ（観念史辞典）』（一九六八――七四））」の項目の導入部分）引用より」
「宇宙に対する解釈として西洋科学、西洋哲学が考え出してきたものの中でも、＜存在の連鎖 Chain of Being ＞ないし＜被造物の階梯 Scale of Creatures ＞という観念は強力なもののひとつである。幾世紀にもわたる精緻化をへて発展してきた観念の常のように、この観念もまた、その多彩きわまり、しばしば自己矛盾をさえ孕んで複雑そのものの歴史的展開を逆にたどっていくことによってしか巧く定義することができない。ここでは、その変幻はてないあまたの定式の中、いつも変わらぬ常数は何であるかを描き出すことができれば足りる。＜存在の連鎖＞とは、それこそ最下位にあって最も取るに足らない存在から、自らは被造物ではないがあらゆる創造の営みがそこをめざす到達点、終着目標であるところの最も完全なるもの（ens perfectissimum）にいたる、一個のヒエラルキーの形に被造物を整序する連鎖ないし漸次移行であるとして、宇宙を有機的に捉えようとする観念である。この観念は西洋形而上学史の中でこの観念を構成する一連の観念群――――漸次移行（gradation）、充満ないし横溢（plenitude,fullness）、連続性（continuity）、そして充足理由（sufficient reason）とった初原理――――を必然的に内包せざるをえないし、それはまた宇宙の中の人間の位置というものを明らかにするが、そこには思想史にとって非常に重要な心理学的、道徳的な、いや時には政治的でさえある意味合いがいろいろ孕まれることになる。」

存在は連鎖している
一なるものから多なるものへ
上なるものから下なるものへ
宇宙は展開しつづける
完全なるものをめざして

けれども
一なるものが善であるならば
なぜ悪があるのかが問われもする
宇宙が合理的であるならば
なぜ不合理があるのかが問われもする

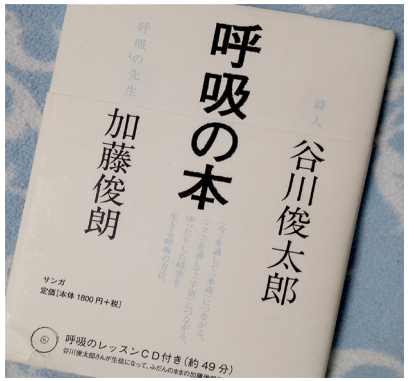
悪や不合理はなぜ存在するのか
それは完全なるものをめざした
連鎖のダイナミズムであるとしてみよう

存在の連鎖は
片側通行のヒエラルキーではないのだ
一は多から上なるものは下なるものから
鏡として照らし返しているのではないか

しかもだたの反映ではなく
創造的な照応なのではないか
完全なるものに新たなものが加わり
より完全なるものへと遊戯できるように

mediopos-772
2016.12.26

■加藤俊朗・谷川俊太郎『呼吸の本』（サンガ 2010.1）



（質問１５）
「気には気柱があるって加藤さんはおっしゃいますが、それはどういうことですか。」
（答え）
「ちょっとわかりにくいかもしれないですけど、気には気柱があります。目には見えにくいんですがはっきりとあります。伊勢神宮に気柱の見える場所があるんです。そこからは天空に向かってエネルギーが通っています。この天空とつながっている道を気柱とぼくは呼んでいます。ですが見えたからって偉くありません。どうってことないんです。ただひとつ言えることはですね、この気柱が見えたり感じたりすることができると、自分のからだの中にこの気柱と似たようなエネルギーの通る道をつくることができるんです。このからだの中のエネルギーの通る道をぼくは心柱と呼んでいます。心柱がからだに通りますと健康体になります。元気で明るく生きていけます。そうそう、心柱が立つと姿勢がよくなりますよ。気持ちがしゃんとしますね。見た目が美しいです。」
　気柱の見方をお教えします。頭の中をからっぽにしてですね、自然に見るだけです。気の発する場所と空の間、空間を見るということです。気柱に焦点を合わせるのではなく、気柱と自分の目の中間、あるいは気柱のちょっと手前に焦点をあてて見るのがコツです。これを「オープン・フォーカス」と呼んでいます。」
（「感想」より）
「今時代は変わらなければならないときにきていますね。世の中は変化しているし、これからもっと変化していくでしょう。そういうときは「まさか」のことが起きるんです。でも「まさか」を「まさか」と受け取らないのが呼吸です。どんな変化がきても、対応して順応していくエネルギーです。」

まさかのときにも
いつもと同じように
吐いて吸って
吐いて吸って

じぶんのなかに
空っぽの柱を立てて
見えない力も
吐いて吸って
吐いて吸って

変わるときでも
いつもと同じように
吐いて吸って
吐いて吸って

mediopos-773
2016.12.27

■藤原辰史『ナチスのキッチン／「食べること」の環境史』（水声社 2012.5）

「非戦闘員も容赦なく戦争に巻き込む総力体制のなかで、主婦に要請されたのは、機械のように寸分の間違いもなく、ありとあらゆる無駄を排除し、台所仕事をこなすことであった。

「人間のなかに台所を埋め込むこと」と「台所のなかに人間を埋め込むこと」----それぞれ台所の合理化を強制させられた囚人と主婦は、なるほどたしかに、まったく次元の異なる存在である。かたや国家の保護の外に置かれた人びと、かたや国家の保護の内にいた人びとである。しかしながら、私は、この両者のあり方に、近現代人が求めてきた食の機能主義の究極的な姿を認めざるをえない。どちらも、人間ではなくシステムを優先し、どちらも「食べること」という人類の基本的な文化行為をかぎりなく「栄養摂取」に近づけているのだ。

いうまでもなく、このような近代キッチンの五里霧中状態、「食べること」の凋落は、現在の日本社会でも日常的に見ることができる。たとえば、食べる時間を削って仕事に充ててきた日本の猛烈サラリーマンたちの行き着いた先が、「瞬間チャージ」が謳われる栄養機能食品であったことは、無数のドラッグストアやコンビニエンスストアが証言してくれるだろう。猛烈に働いたお金で購入した豪華なマンションの豪華なシステムキッチンを、結局、仕事が多忙なあまりほとんど使用しない、あるいは汚したくないので火や油は使わない、という話もしばしば耳にする。葉緑体を体内に埋め込み、太陽光でブドウ糖を生産する技術が開発され、台所と食事を破棄する日も、そう遠くはないのだろう。

では、どうして、「食べること」はここまで衰微してしまったのだろうか。どうして、強制収容所という私たちの生活世界からもっとも遠いところの現象が、こんなにもリアルに感じられるのだおるか。

これは、端的に言ってしまえば、この世界が、ナチズムと陸続きだからである。「餓死」や「孤独死」は、それほど珍しいことではない。二十四時間のコンビニや居酒屋の「雇われ店長」、あるいは慢性的に労働力が不足する看護師に、彼らの執行部が求める仕事の量と質は、場合によっては、人間の生命維持活動に支障を来すほどである。」

「では、どうしてこのようなことになったのか。

それは、いま、地球上を覆う資本主義というシステムの問題に尽きる。資本主義が、一本の長い槍のような右肩上がりの発展という物語を紡げたのは、その土台に持続的な循環システムがあったからである。たしかに、資本主義も循環をもつ。お金と景気が循環して成り立っている。だが、それは真の循環ではない。これはただ、つるつると世界を回っているだけである。真の循環システムが、絶え間なく、労働力と自然資源という絶対に工場で作ることのできないものを市場に供給し、生物の死骸を土に戻すからこそ、猛烈サラリーマンは猛烈たりえたのだ。」

かぎりなく
機能化され
効率化されてゆく
生きること
食べること
働くこと

人はいまやおしなべて
ナチスのキッチンにいる

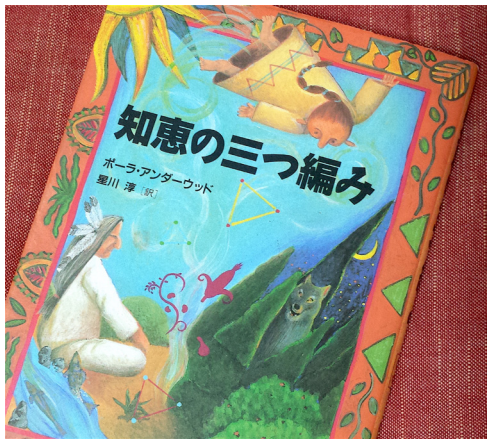
人は食べるために生きているのだろうか
働くために生きているのだろうか

市場に供給される
自然資源と労働力
それらは機能的で効率的であればあるほど
お金というシステムを肥大化させてゆく

食べることの未来は
働くことの未来は
そして生きることの未来は
いったいどこへ・・・

mediopos-774
2016.12.28

■ポーラ・アンダーウッド『知恵の三つ編み』（星川淳訳　徳間書店　1998.8）



「父が私に語った古来の言語には「教える」という言葉はありません。そこから学ぶことのできるシステムはあります。」
「なにかを学ぶために、私は学ぶということを理解するよう促されました。ただそのなにかを頭に入れるだけではふじゅうぶんだったのです。私はパターンを認識することを求められました。それはプロセスを意識的に理解すること、ともいいかえられます。」
「私は「正統」という考え方に大きな違和感をもっています。一つの理由は、なんであれ人間の伝統である以上、学び成長するためには変化への柔軟性が必要だからです。もし物事の原形だけを守ろうとしたら、いつか変化によって本来の目的が果たせなくなるかもしれません。けれどもいっぽうでは、過去を尊重し、伝統を大切にする知恵も忘れてはなりません。」
「私にとってインディアンであることの本質は、宇宙を一つの全体性として理解することだといえます。あらゆる部分があらゆるほかの部分と全面的に関係し合ったものとして理解するのです。それは、個体性を一時的な構造として、全体性を永続的な構造として理解することです。それは物事の関係性を理解し、二次元のかわりに三次元で考えることです。それは物事を時間軸に沿った連続性、ないし因果連鎖でのみとらえず、広大で、複雑で、相互に関連し合った編み目としてとらえることです。そこでは因果律が通用しません。あまりにも多くの物事が同時進行し、あらゆるものがほかのあらゆるものに影響をおよぼしているからです。」
「「いいかい」父は説きました。「世界を見る目はたくさんある。年老いた目を通した見方もあれば、新しい目を通した見方もあるんだ。それぞれにかけがえのない視野を提供してくれる。どの見方にも価値があるんだよ。」

できることは
学ぶことだけ

学ぶためにできるのは
学ぶというその道筋を
じぶんで歩むということ

正しいものを決めてしまうと
ほんらいの正しいものは
ゆがめられてゆく

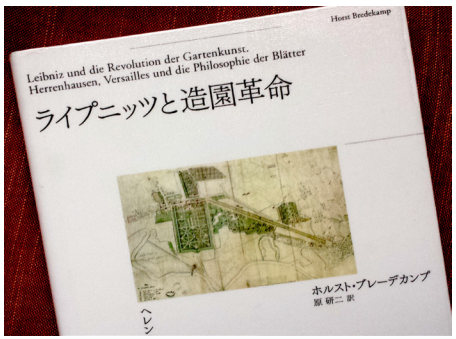
過去から学ぶためには
ほんらいの知恵をまさにいま
生きようとしなければならない

どんな小さなものも切り離されてはいない
そしていつも宇宙とつながっている
その網の目のなかを人は生きている

世界を見るためには
ひとつの目じゃ足りない
たくさんの目を持たねばならない

mediopos-775
2016.12.29

■ホルスト・ブレーデカンプ『ライプニッツと造園革命／ヘレンハウゼン、ヴェルサイユと葉っぱの哲学』
（原研二訳　産業図書　2014.7）



「バロック式庭園と風景式庭園は宥和しがたい仇同士として考えられるべきかという設問の鍵は、ライプニッツ自身にある。」
「ひとつの逸話を様々に変奏しながらライプニッツは、ヘレンハウゼン大庭園が哲学史上独自のステイタスを獲得するよう演出した。それによると彼は哲学的基本認識のひとつをこの庭園の経験から獲得したというのである。それが識別不能原理 Indeszernibilien Prinzip、お互いに識別不能であるあらゆる物は同一であるはずだという原理である。とはいえ創造された世界はあらゆる物が適所を占めているゆえに、その他の物とではなく自分とのみ同一であり得るという特性を持っているのだから、あらゆる物と個体が相互に識別可能であることから出発することが当然だろう。
　1692 年秋、ヘレンハウゼン庭園にてライプニッツが散歩中に選帝侯ゾフィーと交わした会話において、識別性とは何かという問題に話が及んだが、ライプニッツに捧げられた銅板画に残されているのが、この場面である。腰を降ろしているゾフィーのかたわらに侍る官女が、魔法にかかったようにライプニッツの左人差し指を見ている。それはカール・アウグスト・フォン・アルフェンスレーベンが差し出している二枚の葉っぱのうちの一葉である。この出来事についてライプニッツは『ヌーヴォ・エッセ』において観察者の距離感で語っている。「とある日、庭園を散策中に繊細な心の持ち主であらせられる大公妃がこうおっしゃった。二葉の完全に同じ葉っぱがあるとは思われませぬと。散歩に同道の頭脳明晰な紳士がひとり、そのようなものを探すのは簡単ではありませぬかとおっしゃるが、いかに見つけようと努めても、結局、自分の眼こそが違いに気づいてしまうという証人となってしまうのだった」。明らかにライプニッツは葉っぱの形態と構造について研究済みであり、のちに指紋の場合に気づいたことと同じように、どの一葉とて他の一葉と同じではないことを発見していた。」
「あらゆる自然が個別の姿をしているという事実に直面したライプニッツは、形態の充満とは、ダイナミックに形成される世界のスナップ・ショットであると理解したのである。無限に差異化していく区別こそは、普遍的能力の働きなのであると。自然総体のダイナミックな深層構造の認識が庭園と関わるのは、偶然になのか、いやむしろ必然的になのか、という格別な問いは、彼は精力的に『モナドロジー』において答えたところである。」
「マクロコスモスを庭園に集約する考え方は、普遍性の図像学的記号を超え出てライプニッツ著『弁神論』に展開されているが、その確信するところによれば、圧倒的なハルモニーは、四大の互いに組み合わさってできた累加的構造から生まれるのではなく、結合具合の不調（Stroeung）、および階調のなかの破調（UnStroeung）から飛躍展開（Umsprung）するところから生まれるのである。」
「ライプニッツがヘレンハウゼン大庭園に感じたであろう自然らしさと幾何学の共演を、法律家にして芸術史家フリードリヒ・ヴェイルヘルム・バジリウス・ラムドーア男爵が 18 世紀末に挑発的形式へ移行させた。（･･･）
　総論としてラムドーアは庭園の姿の 2 種、バロック庭園と風景式庭園を、それがともに真の造園術を生み出すことができたのだから、妥当とする。」

自然は同じものを生まない
同種の形にも無限の差異がある

どんな葉もほかの葉と同じではなく
その差異ゆえに
世界は常に新しく生まれ続ける
全体は全体にして部分は部分にして
互いを照らしながら曼荼羅化する

宇宙は同じ私を生まない
私にも無限の差異がある

私は私という唯我独尊にして
その差異ゆえに
宇宙は無限の私を生成し続ける
宇宙は宇宙にして私は私にして
互いを照らしながら曼荼羅化する